ちば里山新聞

（第64号）
編集発行　NPO法人ちば里山センター
袖ケ浦市長浦拓２号580-148
☎　0438-62-8895
題　　字　倉島　貴浩
（ワークホーム里山の仲間たち）

千葉県主催「安全講習会」全４回が開催される！

第１回は10月８日（土）山武市さんぶの森交流センターあららぎ館でチェンソー入門講座（基本編）として13名の参加がありました。午前中は林業・木材製造業労働災害防止協会千葉県支部森浩也氏により「安全な伐木作業の基本」の講義がありました。伐倒作業を行うにあたってチェンソー作業者は安全装具としてイヤーマフ付きヘルメット、防振手袋、義務化された保護ズボン（チャップス等）を揃える必要があり、チェンソーの取り扱い方としてブレーキは切断作業以外では掛けること、ガイドバーの先端上部はキックバックがあって危険なので当てないことなどが注意点としてあげられました。伐倒時には作業前に「上ヨシ、周囲ヨシ、伐倒方向ヨシ、退避場所ヨシ」と声を出して指差確認をすることが大事です。午後からは（株）山武産業に移動して、用意された丸太木で垂直切り、丸太を立てて水平切りと受け口を作り追い口の入れ方を実習しました。

第１回講義の森浩也講師

立てた丸太にて追い口

第２回は10月15日（土）さんむ日向の森でチェンソー入門講座（実技編）には13名が参加しました。10年前に植林した殆ど手入れがされてない暗い杉林の中で間伐実技研修を行い、全受講生が各自１本伐採しました。基本編で受け口の作り方、追い口の入れ方を習っているので比較的スムーズに伐倒出来たが、かなり密に杉が生えているので、ほとんどが掛かり木になってしまい、簡単なものはフェリングレバーにて外せましたが、重く掛かったものは、丸棒を二人で十字テコ利用して外す方法が有効でした。

丸棒を使い掛かり木外し

第３回は10月25日（火）袖ケ浦市にてチェンソー講習会（中級編）として、午前中は長浦公民館にて千葉県森林組合南部支所小林哲也氏により「チェンソーによる伐倒作業の基本」の講義がありました。午後は袖ケ浦市椎の森に場所を移し、斜面地の雑木を伐倒する実技研修です。中径木のクヌギ、コナラの伐倒ですが思いのほか難易度も高く、掛かり木も発生して、フェリングレバーを使ったり、残ったツルを切ることにより幹を回転させる方法とか、切り株を切り上げて滑らせる方法も学びました。しかし最後の掛かり木は容易に外せずチルホールの登場となり、なんとか外すことが出来ました。

コナラの追口入れ（椎の森）

第４回は11月12日（土）富津市にてチェンソー講習会（上級編）として、午前中は富津市民の森管理棟ホールにて中級編同様小林哲也氏によりチェンソー作業の安全について、著しく傾いた木の伐倒や掛かり木処理方法などの講義がありました。その後野鳥の森に移り、千葉県森林組合連合会木村正敏氏も加わり、掛かり木処理、突っ込み切り等の実技講習を行いました。全ての受講生が実技を体験出来て、充実した講習会となりました。

突っ込み切り（富津）

ちば里山カレッジ第2、3、4、5回が終了する！

第２回は７月２日（土）四街道どんぐりの森で、「森で育つ子供たち」をテーマにして、まず NPO 法人リトカル代表中田真也子氏にてスマホアプリ「はなもく散歩」が紹介されました。樹名板の QR コードを読み取ることにより、様々な樹木情報を得ることが出来る優れもので、すでに各地の公園または緑地で採用されているとのことです。

次に一般社団法人千葉県冒険遊び場ネットワーク古川美之理事長から、最近子供たちの周りに自然の遊び場が減ってきたことを危機的に捉えてプレーパーク事業を始めたとのこと、自然の中で子供たちを遊ばせるには自由な発想を阻害しないように大人は見守るだけとして、子供が何をしたいのか、その態度の奥にあるものを考えてあげる気持ちが大事だと、話がありました。

四街道どんぐりの森

第３回は９月４日（日）テーマ「これからの森の再生」ということで松戸市の甚左衛門の森にて「都市部の樹林地の特徴」について、ちば里山センター高木喜久雄理事より松戸市の森林率は３％しかなく、わずかに残された樹林地を守る活動を行っているとの話と、「東葛地域の森の特徴」について千葉県里山林保全整備推進事業協議会遠藤良太氏より説明がありました。その後小浜屋敷の森、甚左衛門の森の視察を行い、ナラ枯れ被害等による森のギャップを見て、問題の大きさを知る事が出来ました。午後は向新橋青年館に会場を移し、藤田、遠藤講師を中心に、今回初めての試みとして参加者を４グループに分けて、グループ討議となりました。テーマは森に出来たギャップをどのように利用再生していくかということで、討論の後各グループ別に発表がなされた。色々ユニークな意見が出され、ギャップを利用してさらに明るい森にデザインしたい、そこにツリーハウスを造ってみたい、森の再生のため植樹会を開き、親子で参加し次世代に引き継ぎたい、そのまま自然にまかせたい、など様々な意見が出され、大変盛り上がりました。

グループ討論後の発表（松戸）

第４回は９月１７日（土）テーマ「森林被害にどう立ち向かう」として、午前中は山武の森中央会館で「木を枯らす虫の話」について森林研究所福原一成上席研究員より、千葉県内に広がったナラ枯れのメカニズムについての分かり易い講義がありました。この防除策としては殺菌剤の注入、原因であるカシノナガキクイムシのアタック防止トラップ、ラップ巻きとありますが防除は大変難しく、ナラ枯れ木は早めに伐採し薪などに活用することが現実的なようです。午後は福島成樹講師により、森林研究所構内を視察見学しました。スギの精英樹とサンブスギの成長の度合いの比較、花粉量の予測のためヒノキ花粉の回収などの研究現場が実際に見られるという貴重な体験が出来ました。

杉の成長実証（森林研究所）

クロモジの栽培を目指す

第５回は 10 月２日（日）テーマ「森林資源を生かしたビジネス」として、かずさアカデミアホールで地域資源としてのクロモジ栽培について千葉大学高橋輝昌准教授の講義がありました。クロモジは傾斜が比較的緩やかで、安定した土壌層に群落をつくり、日照を求める傾向があるが、強過ぎる光には弱いことが分かってきています。午後からはきさらづ里山の会柴崎則雄氏の案内で現地栽培地を視察しました。苗木は植栽し５、６年後に収穫でき、収穫伐採後の萌芽更新にて２，３年で再度採取できるので効率的な栽培となっています。また、クロモジからアロマオイル、クロモジ茶、楊枝等を商品化し、道の駅などで販売することにより、大変評判となっているとのことです。

三年振りにエコメッセが会場開催されました！

コロナ禍で３年振りの会場開催となった「第 27 回エコメッセ 2022in ちば」が幕張メッセ国際会議コンベンションホールにて 50 団体の参加に絞っての開催となりました。桑波田実行委員長の挨拶のあと、各ブースではそれぞれのテーマを掲げ工夫を凝らした展示内容でしたが、コロナ禍での入場制限もあり、静かな進行でした。

エコメッセ会場の様子

ちば里山センターのブースではロープワークを利用した災害危険木、ナラ枯れ被害木の安全な伐倒をテーマにポータブルウインチを持ち込んでのデモンストレーションを行いました。新しい伐倒方法に興味を持った人たちが質問に訪れていました。ブースの半分はきさらづ里山の会に貸し出して、クロモジ製品の展示販売に使用してもらいました。クロモジ楊枝、アロマオイル、クロモジ茶等と大変女性に人気でした。ちば里山センター隣のブースでは森林・山村多面的交付金事業団体の「NPO 法人亀成川を愛する会」が活動内容の展示と里山クイズ行って、多くの人が訪れていました。

多くの会員の方々よりタネを提供して頂きありがとうございました

近年、ナラ枯れや台風被害などの跡地に広葉樹の苗木を植えたいという機運が高まっています。そこで、広葉樹の苗木作りに取り組むため、9月の下旬に広葉樹の種集めへの協力を里山会員の皆様にお願いしたところ、50 種類以上の種を集めることができました。コナラ、シイなど高木性のものからマユミ、トベラなど低木性のものまで、多様な種が集まりました。ご協力ありがとうございました。今回は、ウメやサルスベリなど雑木林の中には混在しない樹種も少し集めました。里山の中で花や果実を楽しむことも選択肢と考えたからです。多くの種は乾燥すると発芽しなくなるので、保湿（湿らせた砂を混ぜる）冷蔵で保存します。コブシ、マユミなど果肉や表皮が着いている樹種は水に漬けて、果肉などは腐らせ除去したうえで、同様に保存します。また、モミジ、シデ類など乾燥保存ができる種も、春化作用※１のために保湿冷蔵で保存します。この種を集める場合に考えることが大きく２つあります。それは「遺伝子かく乱」と「種内多様性」です。遺伝子かく乱についてはDNA の解析技術により樹種の地域集団ごとに遺伝的に類似するか否かが評価できます。これに基づき「広葉樹の種苗の移動に関する遺伝的ガイドライン」が定められています。※2、３これを参考にすると、気候が大きく異なる地域のものでないーすなわち千葉県内で集めた種を混ぜても遺伝子かく乱と考えなくて良さそうです。

トベラの実

ガマズミの種

種内多様性については、どの様に考えるかは科学的には難しい問題です。花粉親の数、種を集める木（集団）の遺伝的なバラツキなど多くの要因が考えられるからです。我々ができることは、なるべく多くの木から種を集めること、１本の木からたくさん種を取らないことだと考えます（たくさん種が取れる木を見つけるとついつい種を集めてしまうのですが・・・）。　集まったこれら広葉樹の種について、最近スギ、ヒノキの苗木育成に用いられているコンテナ苗という方法を使って、苗木育成を計画しています。引き続き、ご協力をお願いいたします。　千葉県里山林保全整備推進地域協議会事務局長　遠藤良太

※１：植物が冬の低温状況に一定期間さらされることによって、開花もしくは発芽能力が誘導されること

※２：https://www.ffpri.affrc.go.jp/pubs/chukiseika/documents/2nd-chukiseika20.pdf

※３：地図でわかる樹木の種苗移動ガイドライン、津村義彦・陶山佳久、文一総合出版

令和４年度総会にて千葉県緑化推進委員会西野専務理事がちば里山センターとの業務の連携や見直しも含めて、ちば里山センター理事に就任されました。

里山じまん ⑩

NPO 法人ちば森づくりの会

都市近郊に位置する千葉市の里山（森林）を都市住民により整備・保全する活動　～　行政や森林組合との協働で　～

次期植栽に向け倒木処理林内整備

当会は、千葉市が「里山の保全推進事業」実施に先だって開催した「森林ボランティア技術研修会」の参加者により、平成 13 年３月に市民参加の森づくり活動団体として組織され、平成 17 年にＮＰＯ法人の認証を受け、現在に至ります。

森林施業を通じて健全な森林を育成し、人類にとって望ましい地球環境を実現することに寄与することを目的に活動する、実働型の森林ボランティア団体です。

ちば木育イベント出展

活動地は、市が指定した里山地区３ヶ所のほか、市の総面積の 17%に当たる森林の 99%を占める民有林についても、千葉市森林組合から所有者の意向を受けて活動の対象にしています。この中には県認定里山保全活動協定地区３ケ所もあります。

会員は、74 名うち女性が８名、全員都市住民で、チェンソー等の安全講習、市、県、里山センター主催の外部研修で研鑽、朝礼時のＫＹ活動、林地での実践研修で情報共有し、安全第一で活動しています。ＨＰ（Facebook）等での発信に、若い入会者も多く、会員の半数弱が現役世代です。

整備した里山地区で「秋の里山観察会」を主催し、今年も子供たちを含む市民 26 名と林内観察と木工・竹細工で１日を過ごしました。

秋の里山観察会

収穫した間伐材でログベンチ等を制作し、公共施設に寄贈するほか、「千葉市民産業まつり」「ちば木育イベント」等に出展し、市民・子供たちに体験や樹々に触れる機会を提供し、森林環境の改善により、オオムラサキ、キンラン等観察されています。今後も、「森と自らの健康のために！」活動して参ります。

NPO 法人ちば森づくりの会　理事長　林隆通

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

※※※※※※※※※※※　つれづれごと　※※※※※※※※※※※

あっという間に１年が過ぎ、世間では兎年に因んで飛躍の年とか言っていますが果たして？◆今年こそはナラ枯れ被害木を片付けて新しく植林を行い、里山再生に向かいたいです◆編集後記を今号より“つれづれごと”に変えています。（Y.A）

里 山 の 風 に ゆ ら れ て ⑳

マツナ＜松菜＞　ヒユ科マツナ属

海岸の砂地を好む塩湿地植物である。１年生で１月ごろ芽吹き、高さは１ｍ程になり葉は多肉質で水分を貯めるようで、１０月ごろには星形の実付けて１１月には真っ赤に紅葉し、見頃を迎える。

星形の実がなんとも微笑ましい。

写真・文　赤松義雄　R4.11.6　小櫃川河口盤洲干潟

入会申し込み・問い合わせ先

特定非営利活動法人　ちば里山センター

〒299-0265　千葉県袖ケ浦市長浦拓２号 580-148 ☎0438-62-8895　FAX0438-62-8896（平日９：00～17：00）

E-mail info@chiba-satoyama.net　　ホームページ　http s://chiba-satoyama.net/